

# キリスト教入門講座

## 1【啓示について】

神様は御自身のことを人類に現わされました。それを「啓示」といいます。しかし全ての人にではなく選ばれた人、例えばノア、アブラハム、モーセ、預言者たちに御自分の事を現わし、教えられました。しかも神様は御自分のことをすべて現わしたのではなく、彼らにわずかに現わしたにすぎませんでした。ただ人となった神の子イエス・キリストを通して私たちが知らなければならないすべてを現わされました。

・「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くの仕方で先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」(ヘブライ 1: 1~2)

・「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」(ヨハネ 1: 18)

## 2【聖書と聖伝承】

教会は、神が与えられた啓示のすべてを保持しています。神の啓示を伝える方法として聖伝承と聖書の両方があります。

●「聖伝承」…礼拝、聖礼典、信条、教義、キリスト教生活の模範。

●「聖書」…聖霊が使徒や預言者たちを通して記録した諸書のことです。

聖伝承は、神の啓示を広めるために用いた最も古い方法で、アダムからモーセに至るまではこの方法をとりました。モーセの時までは聖書はありませんでしたが、先祖は子孫に神の教えや生活を伝承の形で語り伝えて来ましたが、聖伝承は聖書よりも古いのです。イエス様も神の教えを伝えるのに、書物で教えるのではなく、言葉と模範をもって行いました。しかし迫害によって生き証人がいなくなるので、教会は書物に書いて後世に残したのです。それが新約聖書です。(旧約も基本的には同じ)しかし礼拝のやり方、儀式の守り方、祈り方などは具体的に聖書には書かれていません。聖書は、聖伝承の一部なのです。ですから聖書と聖伝承の両方を必要とします。

●「教会で守る規則や教理のうちで、あるものはこれを文書の形で得、あるものは奥義に継承した伝承によっている。いずれも敬虔な生活のために同じ効力を持っている。よく教会の規則を知らない者でもこれに反対しないであろう。もし文書に記していない習慣が重要でないといって、これを排斥するならば、いつのまにか福音の要旨を傷つけることになるであろう。もっと適切に言えば、使徒の教えを無駄にしてしまうことになる。」(4世紀の聖大バシレイオス)

## 3【教会を通じて聖書を理解すること】

聖書を編纂したのは、教会です。福音書だけでも10くらいあったのですが、教会は会議で4つに決めました。だからもともと教会に「これは良く、これは駄目

である」という判断基準があったということになります。だから聖書と教会のバランスが必要なのです。これは聖書解釈についても同じように言うことができます。例えば、ヨハネの福音書の著者は、イエス様の弟子である使徒ヨハネではなく、それがエフェソ教会の長老ヨハネであることが、学問的に（聖書批評学）証明されたとしても、教会がヨハネの福音書を聖書として受け入れることは何ら変わりません。誰が書いたにせよ、それを教会が受け入れているからです。そこに聖霊が働いて書かせたからです。

それは神学においても言うことが出来ます。西洋人の発想はすべてをばらばらにしてしまい、それを結び合わせることをしません。マタイの神学、マルコの神学、ヨハネの神学、パウロの神学、ルターの神学、カルヴァンの神学のようにすべてを分けてしまいます。しかしそれは《人間的な面における読み方》にすぎません。大切なのは聖霊が働いてそれらを《教会が受け入れたかどうか》なのです。すなわち、「各個人の神学」ではなく、あるのは「教会の神学」でなければならぬということなのです。

馬車の中で旧約聖書を読んでいたエチオピア人に、使徒フィリポは近づいて「あなたは、読んでいることがお分かりですか」と聞きました。彼は「誰かが、手引きしてくれなければ、どうして分かるでしょう」と答えました。（使徒 8：30～31）

聖書は、一人ひとりの心に語りかけるのですが、同時に教会（伝統）の導きが必要なのです。私たちの私的な解釈を、教会の伝統的な解釈に照らし合わせなければなりません。例えば、教会や修道院で長く読まれてきた読まれ方というものがあります。受難週間の聖土曜日には旧約から 15 か所が読まれます。それらは、すべてキリストの復活の予肖、ひな型として読むことが出来ます。新約の光の中で旧約を読み、旧約の光の中で新約を読むのです。それを通して聖書に一貫性・統一性があるのが分かります。

#### 4 【どこにもキリストを見るように読む】

・「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しするものだ。」（ヨハネ 5：39）

聖書には一貫した全体性があります。その一貫性の軸となり全体性の骨組みとなるのは、キリストというお方です。キリストは聖書の最初の一行から、最後の一行まで、全体を縫い合わせている糸のようなものです。「結合してゆくこと」これが聖書を読む時の原則です。

西洋的な聖書の批評的研究の多くは、分析的な方法を採用し、聖書の各書をいくつかの資料に分解して（Q資料、P資料、J資料、E資料など）、結び目はほぐされ、聖書は最初にあった個々の資料の寄せ集めだとされてしまいました。その研究が悪いとはいいませんがバランスを失っていることは事実です。聖書には、多様性と同時に統一性を見なければなりません。聖書は三位一体の神を証しするものなので、三位一体の像（イメージ）であり、その特徴を同じように持つのです。古い過ぎ越しと、新しい過ぎ越し、紅海と洗礼、などのように旧約の出来事は、新約におけるイエス・キリストのひな型として見る事ができます。

●「クリスチャンというのは、眼を注ぐところには何処にでもキリストを見い出し、そのキリストのうちで喜びにひたることができる存在だ。」  
(アレキサンドル・シュメーマン)

私たちは聖書のあらゆるページにキリストを発見することができるのです。

- ①洪水物語、紅海を渡る、ヨルダン川を渡る＝洗礼のひな型
- ②約束の土地＝神の国ひな型
- ③荒野の40年、バビロンから解放される＝天国へ昇るためのこの世の象徴
- ④モーセ、ヨシュア＝キリストの型

## 5【自分に言われたこととして聖書を読む】

●「霊的な仕事にたずさわっている者は、聖書を読むにあたって、そこに書かれたすべてのことを、他人事としてではなく、自分自身の事として受け止める。」  
(修道士マルコ)

私たちは聖書のどこを開いても、自分自身の問題をそこに探さなければなりません。「どれはどういう意味だろう」ではなく「これは自分にとって何を意味するのだろう」と問うべきです。聖書は救い主と自分との直接的な対話です。聖書のあらゆる個所を、自分の物語として読みましょう。アダムとは「人間」を意味していますから、あなたのことです。神が「あなたはどこにいるのか」と呼ばれたのは、私に対して呼ばれたのです。神はカインに「あなたの弟アベルはどこにいますか」と問います。カインとはあなたであり、アベルとは隣人です。神は私たち一人一人の中にあるカインに問いかけるのです。神に至る道は、他の兄弟姉妹への愛のうちに通じています。

- ①今日は、神様は私に何を話そうとされるのか、何を教えようとするのかを期待して聖書を開きます。
- ②毎日、バラバラな所を読むのではなく、決まったところを、決まった時間に、継続して読みます。
- ③詩編を3編、旧約聖書から1か所、使徒書から1か所、福音書から1か所を読みます。旧約が新約を説明し、新約が旧約を説明するからです。不思議なことです。3つの個所に共通するテーマが見つかるのです。

## 6【神を知る方法について】

- 肯定神学…神は分かるという道
- 否定神学…神は分からないという道

神は無限です。有限な人間が無限な神を知ることは出来るはずがありません。光が強いと視覚が失われるように、知識が多くなると神に到達するために必要な無知が失われてしまいます。神に関するあらゆる概念は幻影であり、人を欺くイメージ、偶像です。

●「わたしは神を知ろうとして進みました。…できるかぎり自分の内に精神を集

中して山の頂に登りました。しかしわたしが目を開けたのに、山の頂（神性）はほとんど見えませんでした。山の頂（神性）はわたしたちを救うために受肉した言の人間性（イエス）という岩によって覆われていたからです。…私たちは最初の幕の背後にあって、しかもケルビムの翼で隠されているものを想像するしかできないからです。ただわたしたちの所に降って来た方—被造物の中で見える者となった神の美しさ—だけを見ることが出来るのです。」

(4世紀のナジアンゾスのグレゴリオス)

●「神的なものは無限であり、理解できません。私たちに唯一理解できることがあるとすれば、それは神が無限であり、理解を超えるものであるということだけです。神に関する積極的な表現はすべて、神の本性そのものではなく、神の本性の周辺的なことから示すにすぎないのです。…むしろそれは神があらゆる存在者、そして存在そのものすらも超えていることを意味するのです。実際、存在と認識は同じ秩序に属します。だからあらゆる認識を超えた彼方に存在する者は、同時にあらゆる本質を超えているのです。逆に、あらゆる本質を超えている者は、あらゆる認識を超えているのです。」

(7世紀のダマスコのヨハネ)

神を知るためには机の上の勉強ではなく、体験（神との一致）が必要なのです。人間は変容しながら新しい人となります。神を知るためには同じ神である聖霊をいただかなければなりません。その為には祈り、神に近づかなければなりません。神との一致の道（修道生活）をたどらずして神を知ることが出来ないのです。キリスト教は哲学ではなく、何よりも生きている神との生命的な交わりだからです。

## 7 【<sup>さんいったい</sup>三位一体について】

キリスト教は、正確にいうならば唯一神信仰ではなくて、三一神信仰です。ユダヤ教もイスラム教も唯一神信仰です。キリストを神とは認めていません。ユダヤ教徒にもキリストをメシアと認めている人たちがいますが、彼らにとってのメシアとは人であって神ではありません。それがユダヤ教とキリスト教の決定的な違いです。キリスト教は三位一体論争を500年してきたのです。

私たちの信じている神様は、三位一体である父と子と聖霊の神様です。父も神様、御子イエス様も神様、聖霊様も神様です。でも三人の神様がいるのではなくて、一つの神様なのです。父の尊厳も、御子の尊厳も、聖霊の尊厳も相等しいのです。誰が一番偉いと言うことはありません。父も全能、御子も全能、聖霊も全能です。しかし三つの全能があるのではなく、一つの全能です。しかしすべての源は父です。ですから父は創られざる者、御子は父から生まれた者、聖霊は父から発出した者と呼んでいます。

聖書では、イエス・キリストのことを「言（<sup>ことば</sup>ギリシャ語でロゴス）」と呼んでいます。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。…言は肉

となって、私たちの間に宿られた。」(ヨハネ 1:1~2、14) ヨハネは、神と言を分け、言も神であるといっています。そもそも言葉とは、誰かの言葉であるはずです。その誰かこそ父なる神であるというのです。キリストは神のことを「父」と呼んでいます。「神を御自分の父と呼んで、御自身を、神と等しい者とされたからである。」(ヨハネ 5:18)「私に栄光を与えて下さるのは私の父であって、あなたたちはこの方について、我々の神だといっている。あなたたちはその方を知らないが、私は知っている。」(ヨハネ 8:54~55)

「父」という名をキリストは用いていますが、これは私たち人間の間で用いられる「父」という言葉とは違います。人間の場合には、ある人が子供の父であり、同時に親の子であるということがあります。子供が生まれた時から、人は父になります。ところが神の場合には、ある時点から「父」になったのではありません。神は永遠に「父」と呼ばれます。始まりも終わりもありません。また、父なる神は「子」になることもありません。神の場合の「父-子」という言葉は、人間関係の言葉ではなく、全ての源という意味で父と呼び、その源から、永遠の初めから生まれていた者としてキリストを子と呼びます。故に父は生む者であり、子は生まれた者です。しかしその誕生は永遠の誕生です。神キリストは、創造物(造られた者)ではなく、生まれた者なので、父に対する子と呼ばれるのです。造る者と造られる者は性質が違いますが、生む者と生まれる者は同じ性質(神性)を持っています。だからキリストは神の性質をもっているのです。

父と子と聖霊というのは、位格といえます。人間なら人格(ペルソナ)というのですが、神様なので人格といわないで、位格といえます。父は父であって子でも聖霊でもなく、子は子であって父になることも、聖霊になることもありません。聖霊も同じです。それぞれ別な方でありながら、その神性は一つであり、意志も、力も、愛も、知恵も、能力もすべて同じです。太陽のことを思い出してください。太陽の本体と太陽から出た光と熱はそれぞれ別物ですが、同じ性質を持っています。地上の光や熱とは性質が違います。それと同じように、源を父と呼び、父から出た父の性質をもった光をイエス様と呼び、父から出た父の性質をもった熱を聖霊と呼びます。光も熱も分離することはできず、光のあるところに熱も同時にあるように、イエス様のいるところに聖霊も共にいます。三位一体は分離することができません。

#### 8 【二つの三位一体について】

・「神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方。だれ一人見たことがなく、見ることのできない方です。」(一テモテ 6:15~16)

・「この栄光と力ある業とによって、わたしたちは尊くすばらしい約束を与えられています。それは、あなたがたがこれらによって、情欲に染まったこの世の退廃を免れ、神の本性にあずからせていただくようになるためです。」

(二ペトロ 1:4)

●「神の本性は分有できないとともに、ある意味では分有できるはずです。わた

「私たちは神の本性にあずかってそれを分有できますが、本性そのものにはやはり全く接近できないままなのです。私たちはこの二つの事実を同時に受け認め、信仰の基準として守らねばなりません。」

(14世紀のグレゴリオス・パラマス)

われらが神の性質をいただき、神と一致するなら本性的な意味で神になってしまい、無数の神々が生じてしまいます。それゆえ神の本質には近づけないままなのです。われらはキリストが受け取られた人間性につながることを通して、弱められた神性にあずかるのです。

ですから三位一体には二つの部分があるのが分かります。

●**本性的三位一体**…父と子と聖霊という、唯一の存在者としての神の存在様式。人間が触れることも、見ることも、知ることもできない神です。

●**オイコノミア的三位一体**…世界を創造し、維持し、救い、被造物に現れ、被造物と交流し、被造物に自らの恵みを与えて変容させる、神の本性から発出した活動力。創られざるエネルゲイアとも言われる。「オイコノミア」というのは神の救済の歴史の事です。この世に現れ、この世と関わり、この世を救う神の事です。

●「照らしと恵みは、神的であり神化する働きをもっていますが、それは神の本質ではなく神のエネルギーです。それは三位一体に共通な一つの力であって働きののです。こうして神の本性はそれ自体において分有不可能であり、ただエネルギーにおいて分有可能なのです。」(14世紀のグレゴリオス・パラマス)

●「神は永遠にわたってその崇高な栄光を保持してこられました。…栄光とは内的完全性の啓示、現れ、反映、そして衣服です。神においては、永遠の昔から同じ本質である御子を永遠に産み、同じ本質である聖霊は発出していました。その統一は三位一体のうちにあって本質的で永遠不動な栄光によって輝いていました。父なる神は栄光の父であり、神の子はその栄光の輝きであり、世界が造られる前からその栄光を持っていました(ヨハネ 17:5)。同様に聖霊は栄光の霊でした。この栄光について神はどのような証人も必要とせず、どんな分かち合いをしなくても完全な至福のうちに生きているのです。けれども、神は無限の慈愛の中に住まうので、この至福を伝え、その栄光に与る祝福された人々が生まれることを望まれたのです。神は被造物のうちにその無限の完全性を出現させ、あらわします。神の栄光は天上の天使たちに現れ、人のうちに反映し、見えることの出来ない世界の壮麗な美しさを帯びています。神は栄光を与え、それに与るのにふさわしい者となった人たちがそれを受け、そして栄光は再び神に帰って行くのです。」(モスクワのフィラーレト主教)

神は万物を創造し、その中に無限で永遠に続くエネルギーを注がれます。このエ

エネルギーこそ近寄りがたい神の光、旧約の義人たちが見たもの、キリストが変容した時に現れた神性です。創られずに被造物を神化する恵みです。神的エネルギーは万物の内に入り、同時に万物の外にあります。パウロがローマ書で言った自然界における神の遍在・現れとは、実は近づくことのできない神の本姓ではなく、万物と交わり、万物に命を与える神のエネルギーのことで、このエネルギーの内に神はおられ、万物に恵みを与え、完成へと導きます。

●「神がわたしたちを創造されたのは、わたしたちが神的本性に与る者となり、永遠の世界に入り、神に似る者となるためです。そして神に似ることは、万物を生み出し、存在しなかったものを存在へと導く恵みによって、わたしたちが神化された時に、実現するのです。」(聖マキシモス)

### 9【カルケドン信条が告白したキリスト論と聖霊について】

キリストは完全な神でありながら、完全な人間になったお方です。ですから神としての性質と、人間としての性質の二つを持っています。(両性論) 同じように神としての意志と人間の意志の二つの意志を同時にもっています。(両意論) これがカルケドン信条で告白されたことです。聖書の中にはこのどちらかの性質のイエス様が現れています。神イエスとしては奇跡を行い、悪霊を追い出し、病気を癒し、自然界を支配し、復活します。人間イエスとしては祈り、眠り、食べ、歩き、罪人たちと交わり、十字架の上で苦しみ、死に、葬られます。神イエスとしては何でも知っておられ、何でもできますが、人間イエスとしては知らないことがあり、知らなくていいことは知ろうとせず、限界を守ります。

神が人間になった理由の一つは、人間の模範となるためです。もう一つの理由は死ぬためです。神は死ぬことができませんが、人間は死ぬことができます。死ぬことができなければ人間の罪を負うことができず、死ななければ復活することもできません。故にこの方は人間となって、人間特有の誕生、罪、死を負われ(連帯し)、それをご自分の中に受け入れてその質を変容されたのです。人間として死を体験し、神として死を滅ぼすのです。だから私たちはイエス様を見て、真似られるところは真似をし、真似ることの出来ないところは礼拝するのです。この神イエス様だけが、人間と一体となってくださった唯一の方なので、人間はこの方によって初めて神と一体になれるのです。故にイエス様は天と地の梯子といわれます。天と地、神と人、永遠と時間、命と死、無限と有限、を唯一ご自分の中で一つに結ばれた方がイエス様なのです。

聖霊様は、単なる神のパワーではなく、意志をもった、三位一体の一つの位格の神であり、永遠の初めから父なる神から発出していました。

・「私が父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち父のもとから出る真理の霊が来る時、その方が私について証しをなさるはずである。」(ヨハネ15:26)

ゆえに父は生む者であり、御子キリストは生まれた者であり、聖霊は発出した者と言われます。聖霊は真の神ですから、父及び子を崇拜し讃美するのと同様でな

ければなりません。聖霊も全能の神なのです。

聖霊は天地万物の初めからいて、この世界をイエス様と共に創造しました。イエス様が地上に来られた時も、聖霊はいつもイエス様と共に働かれます。悪霊を追い出し、病気を癒し、自然を支配します。三位一体は分離しないからです。聖霊降臨の時、使徒たちを代表とする教会の上に降り、教会を地上のキリストの体としました。聖霊がマリアに降って、イエス様が生まれたように、聖霊は信者に降って、信者をキリストの体とします。聖餐式の時には、地上からのパンとブドウ酒の上に神の言葉と共に下り、それをキリストの体と血に変化・変容させます。すべて神が人となったことの再現をするのです。聖霊はいつも執り成しの祈りをし、信者のうちに働き、信者の中に住み、外から覆い、祈りを導き、聖書を悟らせ、信仰を与えます。聖霊は第二の弁護者、助け主といわれます。イエス様が最初の弁護者、助け主であって、聖霊はその働きを継承し、キリストの似姿を人の中に造り、育て、成長させます。

教会は、どんな時もまず「聖霊を呼ぶ祈り」から始めます。「天の王、慰める者、真理の霊…」という祈りです。聖霊がその人に働いているしるしは、信仰を持つことができたということと、聖書や神様の事がよく分かり、神様の愛が感じられることです。奇跡や異言は限られたしるしであって、これは聖霊が選んだ人だけに現れるしるしであって、誰でも現れるわけではありません。

### 1 1 【万物の創造について】

神は愛であり、考えうる限りの善であり、自ら完全にして極めて美しい方ですが、創造物にご自身を讃め揚げさせ、ご自身の恵みに与らせようとして万物を無から創造されました。すなわち創造の目的とは、

- (1) 創造主なる神の栄光を、被造物を通して現すため、と
- (2) 被造物にご自身の善・恵みを与えるため、です。

この世界は神様が創造されました。神様の意志によってそれが作品となりました。神が意志をしなければ、人間は存在することができません。お父さんとお母さんが自分をこの世にいてほしいと思って創ったと思うかもしれませんが、そうではありません。世の中には子供が欲しいと思っても与えられない人がいるからです。神様の意志だけが、その人の存在理由です。だから障害があっても、神様がそのように造られたのですから、意味があるのです。万物が神様によって創造されたということは、万物の中に神様の手の跡が残されているということです。万物は神様のイメージ（アイコンという）なのです。神様は今も働いて万物を創造し、新しくされています。やがて神様はこの世界を新しい世界にされます。それはもう始まっています。

神はあえて人間（被造物）を有限な存在として創造しました。その理由は、被造物が自分を越えたところに目的をもち、何らかのものに向かって絶えず運動させるためです。違いと多様性のあるところにも運動があります。神だけが絶対の安息の中におられます。神は、被造物がご自分を愛し、求めるようにされているのです。神によって創造されていること自体が《恩恵》なのです。すなわち私た

ちの体内に、すでに神や神から来る恩恵を受け入れ、求める力を神は植えつけておられるのです。世界は神化に向かってすでに創造されており、予定されている窮極の目的へとダイナミックに向かっているのです。この創造目的が、御子キリストによって顕になりました。言なる神は万物に現れ、万物をご自分と一つにし、聖霊によって万物を神と一致させてゆくのです。父の言である彼自身が、自らこの世に現れて究極目的を成就させるのです。被造物の最終的な目標は、神との一致・神化にあります。最初のアダムは神に向かって生きるという秩序と目的(方向性)を失ったので、この世は無秩序に陥りました。

そこで第二のアダムといわれるキリストは、その無秩序を回復するために来られました。彼は唯一人、神の完全な像そのものであり、神が創造された人間の本来の姿であり、彼だけが真の人間なのです。この第二のアダムといわれるキリストは、洗礼を通してすべての人間をご自分と一体にすることによって、古いアダムを新しいアダムに変えられるのです。

## 1 2 【父と子と聖霊が万物を創造したこと】

・「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」(ヨハネ1:3)

・「天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。」(コロサイ1:16)

・「神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。」(ヘブライ1:2)

・「御言葉によって天は造られ、主の口の息吹によって天の万象は造られた。」(詩篇33:6)

・「あなたは御自分の息を送って彼らを創造し、地の面を新たにされる。」

(詩篇104:30)

●聖イレナエウスは「子と聖霊は神の両手である。」と述べています。聖バシレイオスは「創造されたものの根源的原因を考えてみなさい—それは父です。創造の働きのもと原因を考えてみなさい—それは子です。創造を完成させる原因を考えなさい—それは霊です。以上のようなわけですから父の意志によって、天上の諸天使は存在し、子の働きによって彼らは生命に達し、霊の現存によって完成されるのです。」と述べています。父なる神は、その両手である御子キリストと聖霊をもって、万物を創造されました。

## 1 4 【神によるこの世界の回復(贖い)】

創造された者の中に、罪と死という病が生じた時、子なる神キリストが人の肉体を着て、それらを取り除く為にこの世に降ってきます。彼は神である自分と人間性を御自分の中で一つにし、神性を浸透させることで人間性に不滅の生命を与え、死をもって罪を処理し、死からの復活をもって死の呪いを終わらせ、復活の初め、

生命の初めとなって下さいました。復活の後、40日間地上にあって復活が確かであることを顕し、その後、昇天して父なる神の右の座につき、父から約束された聖霊を50日目に派遣されました。

聖霊は、人の中に住んでキリストを悟らせ、賜物を与え、聖め、力を与え、聖書を悟らせ、知恵を与え、生命を新しくし、人をキリストと結ばせて一体にします。神からの贈り物は、こうして全て備えられました。人間の全歴史は、神が聖霊を土からできた肉身に対して惜しみなく注がれるこの日のためにありました。こうして、聖霊によって人と神との交流が再開したのです。聖霊によって人はキリストの神秘体につながれ、人はキリストの永遠の生命に与り、キリストを頭とする、新しい一人のアダム（集団）が生まれます。聖霊は教会と共に働いて、全ての被造物をこの「生命の木であるキリスト」に招いて体合させ、彼の生命に与らせるために、この世に派遣されます。全世界を神の国に招待するために教会と共に出かけるのです。こうして、神によって創造された全世界は、無秩序から秩序へ、腐敗から不滅へ、死から生命へと、神父・神子・神聖霊ご自身の働きと力によって回復するのです。なぜなら神の創造に失敗はなく、神の言葉は永遠だからです。

#### 15 【教会とキリストと聖霊との関係】

教会は、キリストがその頭であるので、キリストの身体といわれます。教会は、聖霊がその神性で満たすので、聖霊の充満している場です。神性が、キリストの人間性の内に宿ったように、聖霊がキリストの身体である教会の内に宿るのです。

● 「教会のあるところに聖霊がおられ、聖霊がある所に教会がある」  
(2世紀のリヨンのエイレナイオス)

聖霊は、天地創造の時からいつも働いていました。預言者を通して語り、キリストの受肉の時もそこにいました。悪魔が追放されたのも聖霊の力です。恵みと癒し、奇跡も神と結合するのも、復活するのも聖霊の力でなされました。

● 聖霊は神です。父と同質なる全能の霊です。そのまま、あなたの中に神の聖霊が住むなら、あなたは焼け死ぬでしょう。神は火だからです。しかしあなたは死にません。なぜならこの方が、自分の力を落としてあなたの中に住むからです。なぜ、神は土であるあなたの中に住むのですか。それは永遠に住む練習をしているからです。あなたを復活させるからです。聖霊が住むということがどれほどすごいことかお分かりですか。神は朽ちる者の中には住みません。朽ちない者の中に住みます。パウロもそういっています。「イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かして下さるでしょう。」(ローマ8:11) イエス様もいわれました。「命を与えるのは(聖)霊である。肉は何の役にも立たない。」(ヨハネ6:63) だからあなたは必ず永遠におられる方の住まいとして、永遠に存続するでしょう。

## 16 【なぜ悪は存在するのか】

- ・「神は、罪を犯した天使たちを容赦せず、暗闇という縄で縛って地獄に引き渡し、裁きのために閉じ込められました。」(Ⅱペトロ 2:4)
- ・「自分の領分を守らないで、その住まいを見捨ててしまった天使たちを大いなる日の裁きのために、永遠の鎖で縛り、暗闇の中に閉じ込められました。」(ユダ 6)
- ・「ああ、お前は天から落ちた。明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた。…かつてお前は心に思った。「私は天に上り、王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し、雲の頂きに登って、いと高き者のようになろう」と。しかし、お前は陰府に落とされた、墓穴の底に。」(イザヤ 14:12~15)

悪魔は、他の諸霊を率いて傲慢によって罪に陥ったという説は、古代からキリスト教会にありました。悪魔は、もともとは神によって創造された善なる霊的な存在者である、知恵と自由意志を持った天使でした。この天使は人間が創造される前に、創造されました。神が悪を創造することはありえません。また、善なる者をさらに善なる者に変えることはあっても、まったく逆の悪なる者に造り変えることもありません。また神によって善として造られた者が、自然に悪に変わってしまうことも考えられません。善なる者が悪なる者になるためには、何らかの<意志の働き>が必要です。意志のある者のみが「善なる状態・状況」を「悪なる状態・状況」に置くことができるからです。神が善なる者として造られた知恵と自由意志のある天使が傲慢になり、自分の意思で自ら神のようになろうとして、神から離れ、自分を悪なる状態に置いたので悪魔となってしまったと教会は教えています。

●「彼らに当然属すべき善が欠如し、消失しているために、彼らは悪いといわれるのである。…悪とは不完全な善である。」

「彼らに与えられた善のすべてが変化したわけではない。…彼らに与えられた天使的賜物が変化したとは、我々は決していうつもりはない。その賜物は完璧で、隅々まで輝いている。しかし悪魔たちは、彼らの善を見る能力を閉じて見ようとしないのである。彼らが存在する限り善から生じた善いものなのであり、存在者として在ること、生きること、知ることを望むことによって美と善を望んでいるのである。」

「悪というものは、悪魔においても我々の魂においても、悪として存在するのではなく、それぞれに固有の善のあるべき完全な状態が欠如、不在であることによるのである。」

聖ディオニシオス・アレオパギテース『神名論』(485~531)より

悪魔は本性から悪ではありません。神から、存在、知恵、意志、能力、思考を既に与えられているからです。もし悪魔が本質から悪なら、自分の存在も否定しなければなりません。世の存在者で、善に全く与らないような者は存在しません。彼は「善」という状態に留まることが出来なくなった者であり、神からせ

つかくいただいた「善」なる多くの賜物を感謝できなかった者なのです。悪魔は、自分の善なる性質を否定し、悪になりえない善なる性質を悪にしつづけるという強情者なのです。何が不満だったのでしょうか？自分を生んでくれた者に敵対するとは、何と悪魔とは人間に似ているのでしょうか。実は逆で、神から離れた人間が悪魔に似てゆくのです。

### 17 【神が悪霊の働きを許す理由について】

そもそも人間が、いつも自分の意思で善に向かっていたら悪魔の働きも無力なものとなり、神はすぐにでも悪魔を滅ぼすことができたでしょう。しかし、人間が自分の意思で悪を自分の中に受け入れ、悪魔の似姿となってしまったので、悪を滅ぼせば、人間をも共に滅ぼさなければならなくなってしまいます。そこで神は悪をすぐに滅ぼすことをせず、悪を用いて善を生み出すことを計画されたのです。聖マクシモス(580-662)は、神が悪魔の働きを許可する理由を五つ上げています。

- (1) 攻撃と反撃によって、われらが徳と悪徳とを判断することを学ぶため。…一度、病気になれば、同じ病気を症状によって見分けることができ、病気の人に助言することができます。
- (2) 葛藤と労苦により得た徳を安全かつ不変に保つため。…病気が治ってから健康管理をするようになり、節制をするようになります。
- (3) 徳を高める時に、われらが謙虚を学び、高慢にならないため。…病気になって健康のありがたみが初めて分かり、謙虚になって健康を感謝するようになります。
- (4) 悪を体験してわれらが悪を完璧な憎悪によって憎むためです。…悪に飽きるようにさせるためです。
- (5) 最も重要なのは、冷静さを取り戻した後に、自分の弱さと我らを助けられる神の力を忘れないためです。…自分の弱さを知って、益々神を必要となるためであり、自分を救って下さった神の憐れみ深さを知って、神を愛するようになるためです。

### 18 【人間は神の像と似姿であること】

人間だけが神様の直接創造でした。「我々に似せて造ろう」という相談がなされたのです。人間だけが、神に似せて創造されました。人間は神様の像と似姿をもっています。

・「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。」(創世記1:26)

「かたどり(像・エイコーン)」と「似せて(似姿)」とは原語が違います。そこで教父たちは、人間は「神の像」と「神の似姿」で創造されたと考えました。ところで、神の像の完全な現れがキリストであると書かれています。

・「御子は、見えない神の姿(エイコーン)であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。」(コロサイ1:15)

そこで、キリストこそ神の完全な「像」であり、そのキリストに「似せて」人間は創造されたと教父たちは考えました。そのキリストから離れたので、「神の似

姿」は失われてしまい、「悪魔の似姿」になってしまいました。しかし「神の像」は失われてはいません。「神の像」とは、人間の構造論的なもので、どんなに罪が人を麻痺させても失われぬものなのです。しかし「似姿」は恵みであって、失われたり、成長したりします。洗礼の時、失った「神の似姿」を「胚」の形で聖霊によって受けます。成長するにつれて輝きは増し、背丈も伸び、活気に満ちてきます。しかし、絶えず神に向かって進まず、故意に神に背を向けて、神の命（キリストであり生命の木のこと）から離れて死に向かって行くなれば、「神の似姿」の輝きは失われ、靈的に鈍くなって干からび、消滅してしまいます。この死は靈的な死を意味しています。しかし、それでも「神の像」は失われていません。それは資本金のようなものであって「神の似姿」を成長させてゆく為に、神によって備えられた賜物・恵みだからです。人間が悔い改めて、再び神に向かって生き始めるならば、聖霊の助けによってそれを成長させることができるのです。画家がモデルを良く見てデッサンをすれば、その絵はモデルに似てきますがモデルから目を離せば自分の想像を描いてしまいます。同様に、人となった神キリストから目を離せば、神に似る事はできません。

子どもが親に似るように、人間も神様に似た能力を持っています。たとえば、知性、創造力、理性、自由意志、良心などは動物にはないものです。それらは人間にしかないものであって、神様の性質の一部なのです。良心は、私たちの思い通りになるものではありません。悪いことをすると、良心が痛みます。それは神様が人間の中に植え付けたものです。人間が操作できないのです。

《神の像とは》－自由意志・知性・良心・理性・自己応答能力・精神性・神と交わる力・支配能力などのことです。

## 19【罪と死について】

神様は人間をエデンの園において、戒めを与えました。善悪知識の木から取って食べたら必ず死ぬから食べてはいけないよと言いました。しかしそこに悪魔が蛇の姿でやってきて、嘘をつき「神様はケチだからあんなことを言ったんだよ。本当は食べると賢くなって何でも分かって神様のようになれるんだよ。食べても死なないよ。」と言ったのです。そこでアダムとエバは騙されて取って食べてしまいました。すると目が開いて、自分が裸で弱いということが見えてきました。するとどんどん怖くなって、不安になって「これじゃあ生きていけない。もっと強くならなければ、もっと多くの物を持たなければ生きていけない」と思うようになって、競争して生きるようになり、戦争をして他人の物を奪い合うようになりました。そうやって人間を信じられなくなり、死がこの世界に入ってきたのです。死とは崩壊、分裂です。神様と人間との関係を破壊し、人と人との関係を破壊します。

このように「神のようになりたい」＝自分を神とし、まことの神から離れて生きる生き方を罪と言います。罪とは「的をはずす」生き方のことです。神様という的に向かっていない生活全体を罪と言います。その結果として、さまざまな症状、（怒り、妬み、裁く心、見下げる心、差別、いじめ、満足できない心、劣等感、

優越感、高慢、偶像礼拝、依存症、コントロールを失うことなどなど)が出てきてしまいました。それらは罪というより、罪過、過失と呼びます。自分に罪があるかどうかを知る方法として神様は人間に「十戒」を与えられました。十戒は人間が人間でなくなっていることのチェックリストです。十戒を守れば救われるというのではなく、自分が神とつながって生きるための生活の規範なのです。十戒を破っていると気がついたら、神様との関係が破れているのですから、つぐないをし、修正し、神とつながらなければならないのです。十戒は大切な戒めから並んでいます。一～四までが神と人間との関係について、五～十までが人間と人間の関係についての戒めです。一戒を破ると、それ以降のすべての戒めを破ることになります。その一戒を悪魔は破らせようとしたのです。

エデンの園の中央にあった命の木とは神様(キリスト)の象徴でした。神様だけを命と呼びます。神様は死なないからです。神様の言葉によって生きる。神さまと一つになって人は生きるべきなのです。人間が神から離れて、神でもない者を目指して生きることを罪といいます。命の神から離れた人間はこうして死にました。死は存在ではなく、命である神から離れたから生じた状態なのです。善悪知識の木から取って食べるなどという戒めを破っても、すぐに死は訪れませんでした。死には霊的な死と、肉体的な死の二つがあります。神から離れた人は霊的な意味で魂がまず死にましたが、肉体はまだ生きていました。そこでアンバランスな状態にいて、何を肉体に与えても心が満足しないようになってしまいました。それを霊的な死と云います。やがて寿命が来て肉と魂は分離し、肉は土に帰ります。それを肉の死と云います。先に魂の死がおとずれ、やがて肉の死が訪れるのです。救いはこの逆の道筋をたどることになります。この世でキリスト(命の木)と結ばれることによって、まず魂が生き返ります。肉体は一度土に帰りますが、復活の時、新しい死なない身体をもらいます。その時、人間の救いが完成します。死が肉体と魂の二つに及んだのなら、命も肉体と魂の二つに及ばなければなりません。アダムが肉体と魂の二つで罪を犯したのなら、救いもこの両者に必要なのです。ですから復活というのは魂の復活と、肉体の復活の二つがあるのです。何か靈魂がフワフワと天国の世界に行くことが救いだと思っている人がいたら、それは大きな誤解なのです。キリスト教は肉体の復活をいいます。仏教にはありません。

## 20【救いとは何か】

救いとは神の似姿を回復することであり、キリストに似た者となることなのです。救いには完全・完成というものはありません。もしこの世で完全になったら、神になってしまうでしょう。完全なのは神様だけです。この世で完全になることはできませんが、来世で私たちは完全にされるでしょう。神の恵みと、人間の自由意志の応答によって救いは実現します。神の恵みはいつも完全ですが、人間の意志はそうではありません。人間は神の恵みを受け取る能力が弱いのです。ゆえに、救いとは一回の体験や告白ではなく、一生キリストにつながるによって実を結んでゆく過程なのです。イエス様がわたしにつながっていなさいと言われたのはそういう意味です。

また聖書で「完全になりなさい」といわれていることの意味も、完全とは存在ではなく状態なのだと思います。水は流れていれば腐りませんが、溜まれば腐ります。自転車は走っていても倒れませんが、止まれば倒れます。救いも同じです。キリストに向かって歩き続けている状態、キリストにつながり続けている状態を完全というのです。義も聖も分けて考えるのはなりません。義も聖もキリストのもので、キリストとつながれば義も聖も同時にもらえますが、離れたら義も聖も失います。正しいのはキリストだけ、聖なる方はキリストだけです。故に、救いとはキリストとつながる事であり、つながることによって神の似姿が完成してゆくことなのです。その救いの中に、罪の赦しも、心が清くなることも、復活することも入るのです。

## 2 1 【人間はどのようにして救われるのか】

十字架と復活の業だけで私たちが救われると考えてはいけません。キリストが私たちのためになされた、受肉、洗礼、変容、十字架、復活、昇天、このすべての業を通して私たちは救われます。私たちはキリストの生涯全体を通して救われます。受肉によって人間性を一体にしたという光の中で、十字架も復活も昇天も理解しなければなりません。復活を無視して、十字架のみを強調する救済論はバランスの欠いたものです。キリストの救いの全体の統一性を重んじるべきです。キリストが私たちのためにしてくださった救いは、聖書の中で多くのイメージで伝えられています。この多様性をそのまま受け取らなければなりません。

①**教師**：キリストは真理の教師であり、無知の闇を払って下さり、父なる神様の事を教えてくださいました。しかし救いを「教訓、悟り、知識」の面だけでとられるのは正しくありません。

②**犠牲**：キリストは私たちの過ぎ越しの犠牲の小羊であるということです。世の罪を取り除く神の小羊です。私たちの罪がキリストの上におかれるという考え方は、それは救済論の一部です。

③**身代金（贖い）**：人類を買い戻すために、自分の命を犠牲にして支払ったという考え方は、キリストという犠牲が誰に支払われたのかという疑問が残ります。神なのでしょう。しかし人間を罪と死の奴隷（虜）にしたのは神ではありません。悪魔でしょうか。悪魔は人間を騙したのであって、悪いのは悪魔です。その悪魔に法外な神の子の命が献げられるとしたら、神の敗北になります。罪を借金のようなものと考えて、法律的に考えると行き詰ってしまいます。神をなだめるために自分の命を献げられ、神と人類を和解させたという考え方もあります。

④**勝利**：神様が悪魔と罪と死と闘って地獄に降り、それらを滅ぼし、死の中に捕らわれている人類を解放して天に昇らせたという考え方は、闘いは神と悪魔（罪・死）との間になされたものであって、人類は犠牲者であるということです。人間と神との敵対関係はありません。これは初代教会からよく用いられてきた救済論です。

⑤**連帯・分かち合い**：神が人類とすべてを分かち合うことによって救うという考え方は、人間性を分かち合い、神性を与えます。罪を分かち合い赦しを与えま

す。死を分かち合い命を与えます。救いは癒しを意味しています。互いの一致と交換を通して救いが人類にもたらされるという考え方です。人類を自分と一体にさせることを通して癒し、救い、キリストに似た者に変容するというものです。昔の教父たちは「神が人になったのは、人が神になるためである」といいました。神に人間化によって、人の神化が可能となるのです。この救済論の多様性が大事なのです。ある一つの救済論だけを強調するのではなく、バランスよく語り、見ることです。

## 2 2 【神の恵みと人間の自由意志】

神様は人間の救いのためにすべてのことをしてくださいました。しかし、私たち人間がそれを受け取る、受け入れるのでなければ救いは成就しません。人間には自由意志が与えられました。その意志をもって神を拒絶することも、受け入れることもできるのです。救いとは、このように神の恵みと人間の自由意志による協働作業なのです。

自由意志には本性的自由意志と、各個人の自由意志の二つがあります。本性的自由意志は神の恵みによって既に人間の中に植えつけられている（先行の恵み）万人共通のものであって、常に善を選ぶようになっています。しかし、各個人の自由意志は自分で善と悪を判別し選ばなければなりません。しかし罪によって人間の自由意志には覆いがかけられており、悪を選んでしまうという意志の病にかかっています。その罪が取り除かれなければ、自由意志は正しく機能しないのです。キリストはその罪の覆いを取り除いて下さいました。ですから神の御心を選ぶのも、神の働きであり、恵みとしかいいようがないのです。なぜ、私が神を選んだのか、本当に私だけの意志なのかは疑問です。そこには神の働きがあったとしかいいようがなく、また私も応答したとしか言いようがないのです。

この神の恵みと人間の自由意志という二つの線は絶えず近寄り、互いに触れ合います。しかしどちらか一方の線が他方の線を消してしまうことはないのです。キリストには神の意志と、人間の意志の二つがあり、いつも人間の意志を神の意志に寄り添わせ、一体にしてゆく力がありました。「御心のままに」ということです。私たちもそのように自分の自由意志を用いなければなりません。

神の世界を救われる計画というのは、人間の思いや反対、反抗があっても進んでゆきます。アブラハムの人生の上に神様がなされた計画を思い出して下さい。アブラハムの自由意志によってイシュマエルが生まれましたが、神の計画がイサクにありました。最後には神様の計画だけが残るのです。神様は99歳のアブラハムに現れ、再び自分の計画に参加するように招かれました。彼は自分の意志によって初めた計画を捨てて、神の計画に共働するものとなっていきました。神様の計画は、どんな人間の反抗があっても進みます。エジプトのファラオの心が頑なになっても、それを通して奇跡を行い、エジプト軍を滅ぼし、しるしを見せられ、イスラエルを解放されました。ユダの裏切り、多くの民の裏切りがあっても、それを用いてキリストは十字架にかかり、死を滅ぼしました。神様は悪や悪人を用いてそれを善に変え、ご自分の計画を進められます。

人間の自由意志はいつも、神の計画に参加するように、寄り添うように招かれて

いるのです。人間は自分の自由意志で常に何かを選び、行ってきたように思っています。人生を見渡すと、自分の思い通りになっているわけではありません。やはり最後は、神様の意志や計画に自分を合わせ、委ねてゆくことが平安の秘訣です。

### 【予知と予定について】

神様は最初から、救われる人と、滅びる人に予定することはありません。救いも滅びもあくまでも、人間の自由意志によるのです。しかし、すべてを見ておられる目、将来を予知される目は、ある人を自分の計画を進める道具としてお選びになり、僕にしようと予定されます。こうしてモーセもパウロも予知されたがゆえに、神の僕、道具として選ばれた（予定された）のです。選びとはそういうものです。私たちも、神に選ばれました。神の業を継承するためです。選びは後になって分かってきます。選ばれた者には、神は必ず賜物を与え、ご自分の使命を果たさせます。選ばれた、イコール救いではありません。選ばれたのは、神様の仕事をするためです。救いはまったく別物です。選ばれていない人のために信仰し、祈り、執り成し、献げ物となるために選ばれているのです。中には選ばれたにも関わらず、選びを放棄する人もいます。ユダやユダヤ人たちがそうでした。その場合、選びは他者に移されます。

### 2 3 【教会と聖礼典について】

神様は教会を建てられました。教会はキリストの神秘体です。教会という姿でイエス様は、世の終わりまで共にいてくださいます。教会には聖霊様が満ちています。ちょうどイエス様の中に聖霊様が満ちていたのと同じです。教会の中にはイエス様の言葉（聖書）、体（聖体）、霊（聖霊）、が満ちています。教会はこの世の中で唯一キリストを現すところです。ここで人は聖礼典によってキリストと一体になります。その始まりが洗礼です。そしてその更新が聖餐です。洗礼を受けるとキリストと一体になります。洗礼はキリストとの結婚式です。しかし罪を犯す人間はこの一体関係を破壊してしまいます。そこで聖餐によって再び一体になるのです。ヨハネ福音書には聖餐の記事がありません。その代わりに洗足があります。聖餐はこの世で汚れた私たちを洗ってくれる聖礼典です。

イエス様が私から離れたら実を結べないといわれたのは、教会のことです。幹から離れた枝が枯れるように、教会から離れた信者は死んでしまいます。家で聖書を読んでも意味が分かりません。もちろん一人で聖礼典はできません。家で祈っても集中できません。人は一人で救われるのではなく、関係の中で救われます。神との交わりの中で救われるのです。

教会は一つであり、聖にして、公同なる、使徒継承の教会です。世界中に多くの教会、多くの教派があっても霊的には一つの教会しかありません。来世では教派などはありません。キリストが一人なので、教会も一つなのです。教会は聖なるところです。聖とは神様の住まいであり、神様が地上に姿を現す場です。公同なる教会とは、どこにあっても同じということです。使徒から連綿と伝えられてきた教え、礼拝、信仰を継承するのが教会です。

教会というと建物のことだと思える人がいるかもしれませんが、そうではありません。

せん。迫害されて聖堂が破壊されても、二三人の信徒と、聖書と、聖職者が集まれば、そこが教会となります。教会とは正統信仰をもつ者たちの集まりであり、キリストはそこにいます。信徒がキリストの神秘的な体なのです。キリストが神でありながら、地上の弱い肉体を着て一体になったように、教会はキリストの神性と人間性の両方を併せ持つものです。人間性とは弱さを持つ信徒の部分です。キリストは信者を受肉し、自分の体とされたのです。だからいろんな問題を教会は含むのです。人々がキリストの人間性を見て躓いたように、教会の中にいる罪人たちを見て、多く人は躓きます。しかしそれが教会なのです。それでもキリストは神秘的にそこにとどまり、彼らを受肉し続けます。

●「教会は人間の神化の場なのです。もしあなたが神と一つになってだけ行動したいのなら、ほかのところへは行かないでしょう。禅やヨガ、これらすべてのことは、あなたの中で古い人を強めることしか出来ず、新しい人を誕生させることはできません。…教会は完全な人たちの教会ではありません。…自ら存在する唯一の方の憐れみを待ち望んでいる人々の教会なのです。私たちに救い、神化するのは神の愛です。教会とはこの愛が分け与えられる場なのです。…しかし、高慢な人は教会を愛しません。…教会、それはイエス・キリストの体です。傲慢な人々はいつも神の受肉を拒みます。自分の横で十字架につけられたお方の中に栄光の主を認めたのはあの強盗しかおりませんでした。教会の中に聖霊の交わりと、来るべき王国を見極めるには信仰の目をもって眺めなければならないのです。」  
「アトスからの言葉」より引用。

また、教会は天と地にまたがるものです。天にも教会があり、そこには天使たちの群れ、母マリア、使徒、殉教者、教父たち、旧約の族長や預言者たちが生きて復活を待っています。キリストに結ばれた者は死なないからです。地上にも教会があって肉体において生きている信徒たちがいます。この二つの教会は一つです。人は地上だけで信仰しているわけではありません。天にいる聖徒たちが、地上にいる信徒たちの為に祈っています。私たちは祈られて信仰しているのです。ゆえに、地上にいる私たちも天にいる彼らに執り成しの祈りを頼みます。また死者たちの救いの為に祈ります。これを聖徒の交わりといいます。彼らも私たちも一体であって、一つのキリストの神秘体です。

教会が教会であるしるしが三つあります。聖書、信条、職制です。この三つを持たないものは、教会ではありません。統一協会、エホバの証人、モルモン教などの異端はこの三つをもっていません。それで本物か偽物かを判別できます。

①《聖書》聖書は、神の啓示の言葉を含んだ書物であり、信仰生活をする上で非常に重要なものです。神様は御自分がおられることを、預言者たちに現れて示されました。それを啓示といいます。旧約時代から神様はたびたび預言者に掲示を与えてきましたが、御子キリストによって完全にご自身を現されました。旧約時代から聖書がまだ正典化される前から、イスラエルの民は信仰生活を守り、礼拝

を行って来ました。聖書よりも、信仰生活が先にあったことが分かります。新約聖書が正典化されたのは 397 年です。それまで正典はなかったのに教会は礼拝を行い、信仰を守ってきました。やがてキリストの復活を見た生き証人が殉教していきます。そこで教会は、キリストの教えと出来事を後世に伝える為に福音書を書き残しました。また教会への手紙も編纂されました。聖書は教会が編纂してつくったものですから、教会と聖書のバランスが必要です。聖書のみなどということはありません。パウロは手紙の中で、自分が伝えたものは自分も伝えられたものだと言っています。それを聖伝承といいます。聖伝承の中に、生活によって伝えられたものとして礼拝、キリスト教生活、儀式の行い方、祈祷の仕方などがあります。書かれた伝承として聖書があります。聖伝承の中の一つ、書かれた伝承が聖書だと思ってください。

②《信条》しかし聖書はどう読んでも良いものではありません。100 人いたら、100 人の解釈が違ってしまいます。初代教会では、キリストに対する様々な教えが出て来てしまいました。そこで教会は会議を開いて、これだけは信じましょう、とまとめてまとめたものを「信条 (信仰箇条)」といいます。五つの信条が作成されました。ニケア信条、ニケア・コンスタンチノーブル信条、カルケドン信条、アタナシオス信条、使徒信条です。この中でもっとも、世界信条といわれるのは、ニケア・コンスタンチノーブル信条です。使徒信条は、正確にはローマ洗礼信条といい、地方信条なのです。この中には神様のことがまとめてあります。これを知らなければ、再び初代教会の混乱の中に舞い戻ってしまうことになるでしょう。良く初代教会に戻ろうと言いますが、初代教会に戻ったら、新約聖書もなく、信条もなく、混乱してしまうでしょう。聖書も、信条も、聖霊が教会と共に働いて制定してきた結実なのです。

③《職制》職制とは、神が教会の中に立てられた教師たちのことです。昔は監督、長老、執事とか呼ばれました。教派によっては主教 (司教)、司祭 (神父や牧師たち)、輔祭 (助祭、伝道師) と呼ばれます。呼ばれ方が違うだけで働きは同じです。彼らはキリストの働きを継承する者です。教師たちの仕事は、伝えられた信仰、生活、祈り、礼拝、聖伝承を後世に伝えることです。また信者をキリストの似姿に育て、罪を戒め、訓戒し、キリスト教的生活を教え、異端から守り、病人を癒し、悪霊を追い出し、聖礼典によって人を神と一体にし、祈りをもって執り成し、キリスト教を伝え、信じる者を起こし、キリストが来られる時に信者たちを備える働きがあります。彼らは神からその賜物をもっています。本来の聖職者とはキリストのひな形であり、キリストを地上に現わす責任がある者なのです。預言者、祭司、王の三つの働きをするものです。預言者としては説教、教えです。祭司としては礼拝の執行、聖礼典の執行、病者の癒し、祈りによる執り成しです。王としては教会の管理、異端との戦いです。

聖職者を補佐する者として教会では、執事、役員、長老といわれる信徒の奉仕者がいます。教会は執事会、役員会、長老会を構成し、合議によって運営されます。それは聖職者たちを支えるためと、教会が異端や独裁から守られるためです。聖霊は誰にでも働いており、私たちは互いに学び合い、互いに聞き合わなければな

りません。皆の意見に従うのが神の平和です。教会の運営は役員会に委託されていますが、年に一回「教会総会」を開いて、信徒に報告をしなければならないことになっています。また、重要な議題（牧師の人事に関する件、教会建築、教会規則変更など）は役員会ではなく、教会総会で決められます。ですから信徒の方は教会総会に参加しなければなりません。

#### 2 4 【信仰生活のバランスの大切さ】

「聖書と教会」、「信仰と行い」、「恵みと自由意志」のバランスが大切です。キリストの神性と人間性のバランス。西方教会（プロテスタント教会を含む）と東方教会のバランス。成文祈禱と、自由祈禱のバランス。言葉と体で祈禱するバランス。説教と聖餐のバランス。礼拝堂での祈禱と、家庭での祈禱のバランス。この世と神の国のバランス。教会生活と社会福祉運動のバランス（神と交わることと、人と交わること）。などなど、信仰生活はすべてバランスです。私は統一協会に行き、視野が狭いことがいかに恐ろしいことかを体で体験しました。そこで神学校 3 年の時に、いろいろな教会に参加して、体で礼拝を知りました。その結果、「バランスを失うことがいかに危ないか」ということと、「本物はどこにもいるし、偽物もどこにもいる」ということを知りました。

信仰は行いを伴わなければなりません。信仰と行いを切り離してはいけません。聖書を読むこと、祈る事、教会に来ること、献げ物をする事、すべて行いです。ただ人間の善行によって人は救われるわけではありません。キリストによって救われるのです。いくらキリストを信じていても、隣人に悪を行い、周りの人を苦しめ、傷つけるなら罰を受けます。自分の悪を認めないなら許されません。信仰のみなどということはありません。十戒を守り行うことは、世の終わりまで有効です。信じているから何をしてもいい訳ではありません（初代教会の当時からそのような異端が現れました）。キリストの力によって十戒をはじめとするキリストの戒めを守り、行わなければなりません。

#### 2 5 【聖なる空間、教会芸術が大切である理由】

教会には聖なる空間があります。聖堂があります。聖所があり、聖祭壇、聖イコン、聖祭服、聖器物があります。プロテスタントは聖なるものは外には無く、自分の内に置きます。つまり個人の信仰に置く傾向があります。「自分が信じたら聖くなる」という教えです。しかし自分の信仰といっても、感情ですから、いつもぐらぐらして確信がありません。自分が聖だと思えば聖になり、聖だと思わなければ聖にはならないのです。しかし、それでは聖書や聖餐は自分が聖だと信じなければそうではないのでしょうか。そんなことはありません。人間が信じようが、信じまいが、聖なるものは聖なるものなのです。人は聖なるものに与って初めて聖になります。旧約聖書などを見ると、すべてそのようになっています。（祭壇に触れると聖になる、血が振りかけられると聖になるなど）聖なる方は神様だけです。その神と交わるから聖になるのです。反対にプロテスタントでは、聖なるものは信仰ですから、自分が信じなければと頑張ってしまう。そこで勢い、意識が「信じなければ」という自分の信仰、感情に向きます。意識が上なる神ではなく、内側に向くのです。それは現代の福音的律法主義になります。聖なるも

のは外にあるからいいのです。弱い人や、病気の人や、老人はどうやって頑張ることができるでしょう。彼らは頑張ることができません。教会の聖なる空間は、天国を垣間見せてくれるものです。イコンは「天国の窓」といわれます。イコンは偶像ではありません。7世紀の公会議で認められました。イコンを通して神を瞑想するためにあるのです。私たちは礼拝を頭でははいけません。礼拝は勉強会（講演会）ではないのです。体を置いて来てはいけません。目でイコンを見、耳で神の言葉と賛美を聞き、鼻で香の香りを嗅ぎ、口には聖体、手では十字架をかき、足で立ち、体でひれ伏します。体全体で礼拝するのです。旧約時代はすべて体験学習、再現学習でした。仮庵の祭りでは小屋を建てて住みました。過ぎ越し祭では苦菜とパンを食べました。教会芸術は音楽だけではありません。イコン（聖画）、教会堂、祭服、典礼色などすべてに及ぶのです。この世がそもそも神を現すイメージであり、人間も神のイメージなのですから、礼拝堂（聖堂）は、キリストのイメージでなければなりません。

## 26 【信仰とか救いは個人のものではない】

信仰を個人のものにしてしまったのはプロテスタントの影響でしょう。自分で聖書を読み、自分の口で告白し、自分で信じることに重きを置いたからです。それは決して悪い事ではないのですが、バランスを欠いたものになったように思います。その結果、個人で信じない者は救われないということになってしまいました。個人で信じることは決して間違いではありませんが、救いは個人のものでなく、教会共同体全体のもの、社会全体のもの、宇宙全体（被造物全体）のものであるということを忘れてはいけません。

ひとりの信仰によって全体が救われるということがあるということです。それはパウロの手紙の中にもみられるものです。一人のアダムによってすべての人が罪とされたように、一人のキリストによって多くの者が義とされるのです。10人の正しい人がいるなら町は滅ぼされず、ノアという一人の義人によって家族は救われ、カナンの子や会堂長ヤイロの信仰によって子どもは救われました。キリストはすべての人の罪を負われたのであり、すべての人は赦されたのです。なぜなら救いはつながっているからです。一人で生きている人は誰もおらず、一人で信仰を持つ者は誰もおらず、一人の信仰者が起こされるまでに多くの人がその人に関わり、犠牲を注ぎ、愛し、助け、援助してきました。自分の命も、自分の信仰も自分だけのものではないということなのです。救いは全人類全体のものなのです。そうでなければ私たちは何のために隣人の為に祈るのでしょうか。捧げられた犠牲は無駄なのでしょうか。そうではありません。誰かの犠牲が平和を前進させ、悪を止めるのです。私たちは一人で救われるのではなく、唯一の人間家族の一員として救われます。クリスチャンは「私」ではなく「私たちをお救い下さい」と祈るのです。人類は三位一体の像なのですから、互いに隣人と関係しており、私たちは結合されたものであり、分かち合いの愛によって生きるようにされているからです。私の救いは、分かち難く隣人の救いとつながっているのです。

夫が信者であり、妻が未信者の場合、二人は一体なので、妻は救われます。この逆も同じです。また彼らの子供も聖いといわれています。キリスト教徒でない人

を汚れていると見てはいけません。彼らもキリストの像を持っており、キリストの刻印があり、キリストの御手の作品であり、神のものなのです。神のものは神におまかせしなければなりません。人間が操作してはならないのです。すべての人の中にキリストを見ることは信仰があつてこそ可能です。

## 27【祈りについて】

「父と子と聖霊の神様」「天の父なる神様」「イエス様」「聖霊様」「主よ」というような呼びかけをします。呼びかけの仕方は自由です。祈りの最後は、「栄光が世々限りなくあなたにありますように。アーメン。」とか「イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。」といます。

祈祷の中で「父と子と聖霊」という名前が出てきたときには、右手の親指と人差し指と中指を三本合わせ、薬指と小指を内側に折って、胸に十字を切ります。額から胸、右肩から左肩に十字を切ります。自分の体に十字を切るのは、昔からの習慣であり、体への祈りです。私の知性も感情も行いも清めて下さいという思いをもって、神様を記憶します。

頭を下げるのは三種類あります。小拝（十字を切って頭を下げます。）躬拝（十字を切って、その手を大地につけて体を曲げます。）伏拝（十字を切って、床に平伏します。これは受難節の時にします。）体で祈るようにしましょう。

祈りを覚えるのは簡単ではありません。祈りは神様との交わりのために最も良い方法です。祈りは一生かかって学ぶものです。

祈りを教えるために教会は「祈祷書」を持っています。これは教父たちが作ったものであって、聖なるものであり、信仰生活の伝統と体験の中で作られたものですから、その人をより早く成長させることができます。祈祷書は多くあり、一生かかっても使いこなすことはできないでしょう。一番有効な祈祷は、教会で祈ることです。教会はキリストの体であり、聖霊が充満しているからです。教会に自分の体を持って来ることから始めなければなりません。聖堂で立って祈ると、集中し、神を見上げることができ、礼儀をもって神を神とすることができます。教会で行われる朝の祈祷、夜の祈祷は、私たちに正しく祈ることを教えてくれます。聖堂で自分の順番が回ってきて、真ん中で代表して祈祷文を読む時には（聖書もそうですが）、大きなわかりやすい声で、他人が聞き取れるようにはっきりと朗読しなければいけません。もごもごと読んだり、つかえたり、飛ばしたりしないように気をつけましょう。何を読んでいるのか分からないということにならないようにしましょう。聖書が個人で持てなかった時は、教会には専門の朗読士（輔祭）がいました。彼らは良い声で、民衆に祈祷を朗読しました。だから朗読は訓練しなければなりません。大きな声で読むほうが意味も分かってきます。これと別に私たちは自由祈祷をいたします。牧師や他の信者さんの祈祷を聞きながら、真似をするとよいと思います。歩きながらでも、台所に立っていても、寝ていても「主よ、私を憐れんでください」と祈ることができます。神様と交わり、会話するのはいつでもよいのです。子どものような短く、単純な祈りも美しいものです。立派な言葉で祈ろうと考えるのではなく、人に聞かそうと思うのではなく、神様の前に正直な心を注ぎ出すこと、神様に本心から語っているように祈ることが大切です。ですから、個人で、家で祈る時には、うめくような祈り、

叫ぶような祈りをしてもよいのです。大事なことは正直であることです。ただ聖堂で大勢の前で祈る時は、周りの人のことを考えて祈らなければなりません。他人が聞きたくない言葉や、不適切な言葉を用いないことです。献金のお祈りには「式文」があります。それを用いてください。